

「クマ送り」の系統

——羅臼町オタフク岩洞窟におけるヒグマ儀礼の検討——

佐 藤 孝 雄

はじめに

- 1 遺跡と出土資料の概要
- 2 オタフク岩洞窟のヒグマ儀礼

3 「クマ送り」の系統

おわりに

論文要旨

アイヌ文化の「クマ送り」について系統を論じる時、考古学ではこれまで、オホーツク文化期のヒグマ儀礼との関係のみが重視される傾向にあった。なぜならば、「アイヌ文化期」と直接的な連続性をもつ擦文化期には、従来、ヒグマ儀礼の存在を明確に示し、かつその内容を検討するに足る資料が得られていなかったからである。ところが、最近、知床半島南岸の羅臼町オタフク岩洞窟において、擦文化終末期におけるヒグマ儀礼の存在を明確に裏付ける資料が出土した。

本稿では、まずこの資料を観察・分析することにより、当洞窟を利用した擦文化の人々がヒグマ儀礼を行うに際し慣習としていたと考えられる6つの行為を指摘し、次いで、各行為について、オホーツク文化の考古学的事例とアイヌの民俗事例に照らして順次検討を行った。その結果、指摘し得た諸行為は、オホーツク文化のヒグマ儀礼よりも、むしろ北海道アイヌの「クマ送り」、特に狩猟先で行う「狩猟グマ送り」に共通するものであることが明らかとなった。このことは、擦文化のヒグマ儀礼が、系統上、オホーツク文化のヒグマ儀礼に比べ、アイヌの「クマ送り」により近い関係にあったことを示唆する。

発生に際し、オホーツク文化のヒグマ儀礼からいくらかの影響を受けたにせよ、今日民族誌に知られる北海道アイヌの「クマ送り」は、あくまでも北海道在地文化の担い手である擦文化の人々によってその基本形態が形成されたと考えるべきである。